

- 註8 Bc種ではBa・Bb種を施す場合とは違って、幅広いハケ工具であるため、原体に使用する板材には良好な太い材を均質に入手する必要があったと考えられる。
- 註9 第IV期後半の仲哀陵古墳出土埴輪には、B種ヨコハケを二周、もしくは三周して埋める個体が少量ながら存在する。それは、タガ間隔が10cm前後とかなり狭いにもかかわらず、ヨコハケ工具の幅が4cm前後とそれ以上に幅狭いものであるため、一周するだけでは埋めることができないことがある。この時期ではもはや、B種ヨコハケの施文方法とタガ間隔は連動していない。ここではBd種ヨコハケに移行するとともに、その退化がみられる時期と捉えることができる。この点については、すでに一瀬が「・・・本埴輪群がタテハケ主体であるという状況から、ハケ工具をタテハケ調整の連続の中でヨコハケを行なうという環境に変化したというヨコハケ2次調整の退化現象として再度、登場したものと考えたい。」[一瀬1992a]と指摘している。つまり、仲哀陵古墳にみられるBb種ヨコハケは、この期においても依然第III期の特徴が存在するのではなく、第IV期後半にみられる退化傾向と捉えるべきである。たとえ現象面としてBb種ヨコハケに分類されるものであっても、そのタガ間隔が第III期のそれと比較して幅狭いものである場合は、第IV期後半に位置づけることができるという点においてもタガ間隔の比較は有効であると考える。
- 註10 一辺33mを測る岡古墳は一辺30m程の割塚古墳とともに、仲哀陵古墳に近接して築かれている。岡古墳の調査により、これらの方墳と仲哀陵古墳との築造時期に1世紀近い隔たりがあることが判明した[天野・小西・高山1989]。
- 註11 津堂城山古墳出土埴輪と類似する埴輪としては、八尾市萱振1号墳、大阪市一ヶ塚古墳出土例などを挙げることができる。
- 註12 大鳥塚古墳出土埴輪には硬質を呈するものも確認されることから、この期に含めて考えているが、口縁部形態、全体形態において仲津姫陵古墳と同様の古い様相をもつものがあるなど統一性を欠く。
- 註13 本市調査HM95-5区において、井戸枠に転用されたこの種の埴輪が出土する。径50cm近くを測る大型の鰐付円筒埴輪である。調査区に近接して野中宮山古墳、はざみ山古墳が存在するが、時期的な相違が大きく、この種の埴輪がいづれの古墳に樹立していたかは不明である。
- 註14 1978年、大阪府教育委員会の調査による。「大阪府立近つ飛鳥博物館」にて保管されているものを実測させていただいた。
- 註15 古市古墳群でも極めて小規模な生産である場合に限って、野焼き焼成が認められる。土師の里8号墳は一辺約12mの方墳で、埋葬施設に三基の円筒棺を使用している。そのうちの二基は専用棺で、中でも第1主体部の円筒埴輪には黒斑が認められる[中西・天野・川村1994]。埴輪の特徴から仁徳陵古墳併行期と考えるが、この期においても専用棺の製作という特殊な事情のある場合においては野焼き焼成であったことが考えられる。

第4節 5世紀代の蓋形埴輪の変遷

1 はじめに

西墓山古墳の蓋形埴輪は少なくとも2個体を確認できるものの、全体形態を窺えるものではない。肋木部分の出土はないが、それを有するものはなかったと考え、西墓山古墳の典型的な蓋形埴輪として図上での推定復元案を試みたのが図104である。また、本書に掲載した野中古墳の調査から出土した蓋形埴輪は比較的良好な資料である。^{註1}ここでは、これをも含めた形態的特徴を検討するとともに、5世紀代の蓋形埴輪の中での編年的位置づけを試みたい。

蓋形埴輪の型式分類はすでに田中秀和[田中秀1988]、高橋克壽[高橋克1988・1992b]、松木武彦[松木1990・1992]らによって試みられ、その変遷過程の一端を追うことができる。さらに立ち飾りの形態は伊賀高弘[伊賀1989]、櫻井久之[櫻井1991]らの論考がある。それらの成果を受け、畿内以外での地域性研究[松木1994b]や、蓋形埴輪として初現期の資料の発見[伊

賀 1996] があり、その型式学的研究はある一定の水準に達していると言えよう。

しかしながら、その編年作業は資料の存続時期の初め頃に偏る傾向にあり、5世紀全般にわたった蓋形埴輪の位置づけに関しては未だ充分とは言えない。それは、蓋形埴輪自体がバリエーションを増して5世紀に展開するにもかかわらず、大型墳やそれに準ずる古墳出土例の資料不足という点にある。このことから本論では、その展開を検討するにあたり、5世紀を代表する古市古墳群の主要な古墳からの出土例を軸とする。古市古墳群は、地域格差を配慮する必要がなく、また円筒埴輪編年が充実することから、詳細な時間的位置づけが可能である。資料として本市出土野中宮山古墳（図 105）、大鳥塚古墳（図 106）、はざみ山遺跡（図 106）^{註4} の各出土例を提示するとともに、5世紀代の蓋形埴輪を再整理し、新たな分類案を試みることから始める。

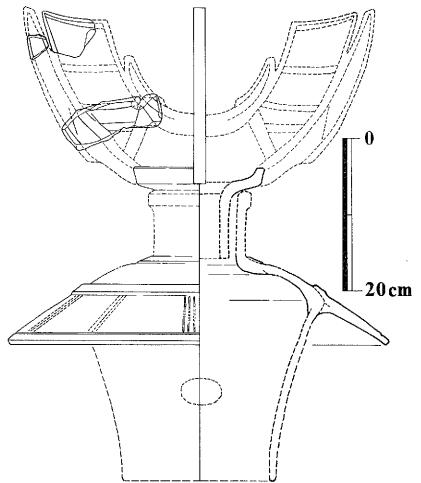


図 104 西墓山古墳蓋形埴輪推定復元図

2 蓋形埴輪の分類

立ち飾りを有する蓋形埴輪の中で、なおかつ肋木をもたないものに限定し、笠部の表現の違いによって三大別する（図 107）。

A 類型

笠部中位に突帯もしくは線刻を巡らし、その下を横方向の線刻で二段に分けて、各段に放射状の線刻を施すもの。このスタイルは肋木の有無や笠下半部を段差で表現するなどの点で違いはあるものの、大きくは4世紀後葉の日葉酢媛陵古墳〔石田 1967〕、瓦谷1号墳、御毛通古墳〔伊賀 1996〕例に共通するものである。蓋形埴輪の初現的形態を受け継ぐという点で、A 類型は蓋形埴輪の中でも主流であったと考えられる。

これに属するものは、大阪府津堂城山古墳〔天野 1993b〕例で川西の円筒埴輪の編年で第Ⅱ期に相当する。やや後出するものの同じく第Ⅱ期には京都府庵寺山古墳〔杉本 1990〕、鳥居前古墳〔松木 1990〕出土例がある。これに続くものとして第Ⅲ期には大阪府野中宮山古墳、大鳥塚古墳、奈良県平塚1号墳〔町田 1974〕出土例があり、第Ⅳ期には大阪府応神陵古墳〔吉田珠 1994a〕、誉田丸山古墳〔吉田珠 1994b〕、御獅子塚古墳〔山元 1986〕、はざみ山遺跡〔岩崎他 1984〕、野中古墳、奈良県平城宮下層 SX7800〔田辺・安田・巽 1982〕、日高山1号墳〔奈良国立文化財研究所 1985〕、京都府上人ヶ平16号墳〔石井・伊賀他 1991〕の各出土例がある。

B 類型

笠部中位に突帯もしくは線刻を巡らす点ではA 類型と同様であるが、その下は二段に分けず、放射状の線刻を施すもの。全体の法量はA 類型の同時期のものに比べて、やや縮小気味である。今のところ4世紀に遡る確実な例は見当たらないものの、第Ⅱ期の大阪府一ヶ塚古墳例〔櫻井 1990〕^{註5} がこの類型の最古に位置すると考える。

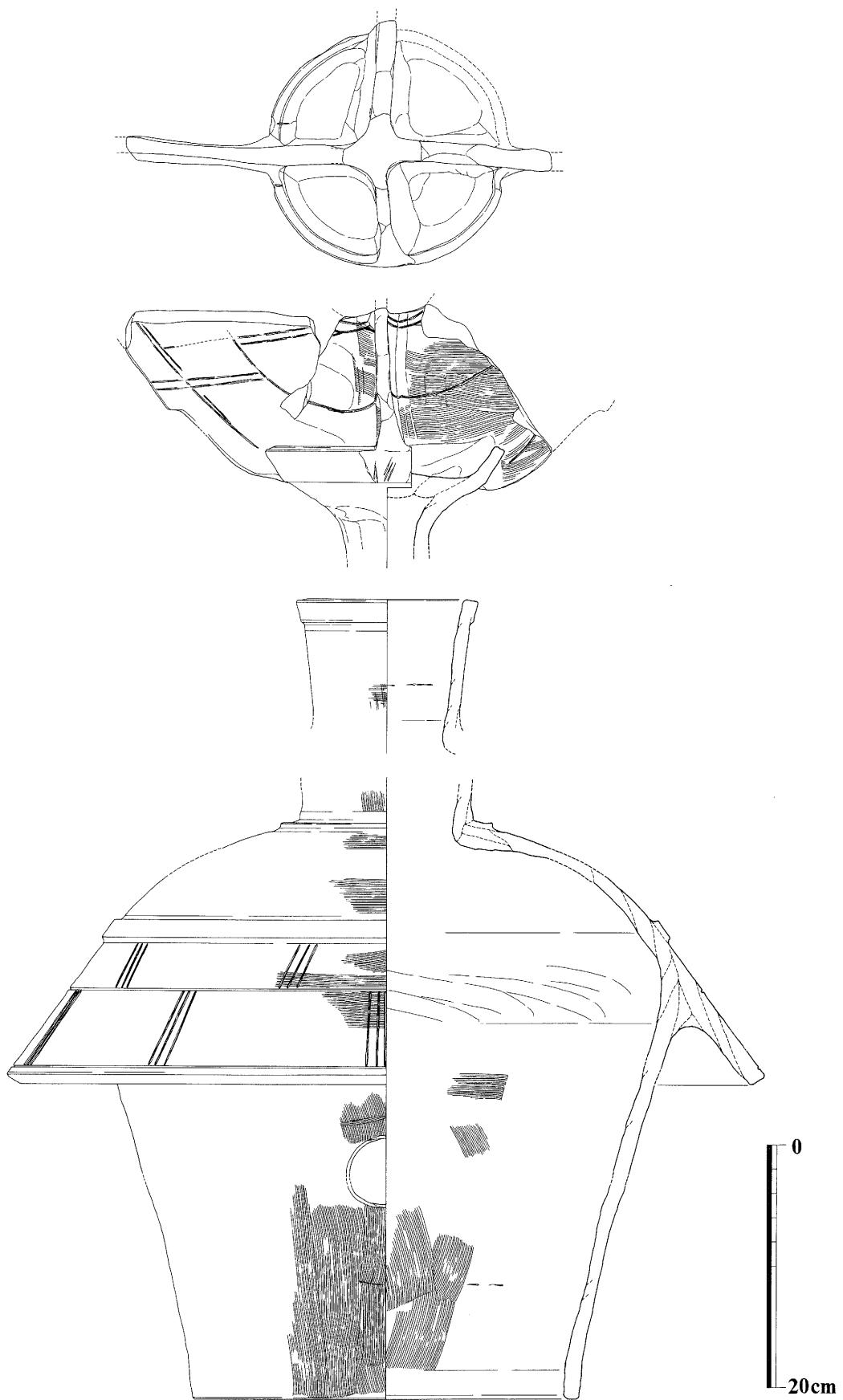


図 105 野中宮山古墳出土蓋形埴輪実測図

続いて第Ⅲ期には宮崎県西都原 171 号墳 [高橋克 1993]、本例の西墓山古墳、第Ⅳ期には大阪府土師の里 8 号墳 [中西・天野・川村 1994]、古室遺跡 [一瀬 1990b]、はざみ山遺跡 (HM86-5 区)、黒姫山古墳 [末永・森 1953]、長原 142 号墳 [櫻井 1993a] の各出土例がある。また笠下半部と同様に上半部にも線刻を施すものがあり、最も古い例では大阪府履中陵古墳 [福尾 1995] が挙げられる。同様のものは、この他にも第Ⅲ期の大坂府心合寺山古墳 [吉田野 1996]、第Ⅳ期の大坂府黒姫山古墳 [野上 1982]、藤の森古墳 [小浜 1993]、京都府山畠 4 号墳 [中塚・吉田 1989] の各出土例が続く。

C 類型

笠部中位に突帯を巡らし、その下は線刻を施さず無文のもの。4 世紀に遡る例は今のところ見当たらないものの、4 世紀末の資料に無文の蓋形埴輪の存在があることから、こういった形態の初現が遡ることは充分に予想される。

今のところ最も遡る例は兵庫県舞子浜遺跡 [高山 1995] があり、川西の第Ⅱ期に相当する。ハケで器面を整えるが線刻などは施さない。^{註8} 第Ⅳ期には大阪府蕃上山古墳 [野上 1982]、西馬塚古墳 [伊藤 1994b]、京都府上人ヶ平 14・16 号墳出土例、第Ⅴ期には京都府上人ヶ平 9 号墳出土例がある。類例の多くは 5 世紀後半に集中しており、舞子浜遺跡例との間を埋める資料は今のところ見当たらない。しかし形象のモデルそのものは当該期を通して存在したであろう。

以上に示した各類型における笠部の表現の違いは、すでに田中が重視し類型化を行なっている。そして、こういった表現の違いは新古の序列を示すとした。おおまかな点では田中の分類案と一致をみるが、^{註9} 例示した資料の相互の現状からは、必ずしも新古を決定することはできない。

類型別に時期を追って図示したものが図 107 である。この図から、A・B・C の各類型はともに第Ⅱ期には出現し、C 類型のみ直接、連続的に後続する資料は見当たらないものの、A・B 類型はこれ以降も継続することが分かる。このことから、これら三類に認められる笠部の表現の違いは単に時期差を表出しているのではなく、表現を違えることで一定の用途、機能、もしくは蓋形埴輪の設置位置などによる差として存在していたと捉える方が妥当と思われる。5 世紀代には異なる系列に属する蓋形埴輪が併行していたと考えられるのである。ただし、その存続期間と各期の出現頻度には多少のずれがあり、この現象を田中は強調していることになる。

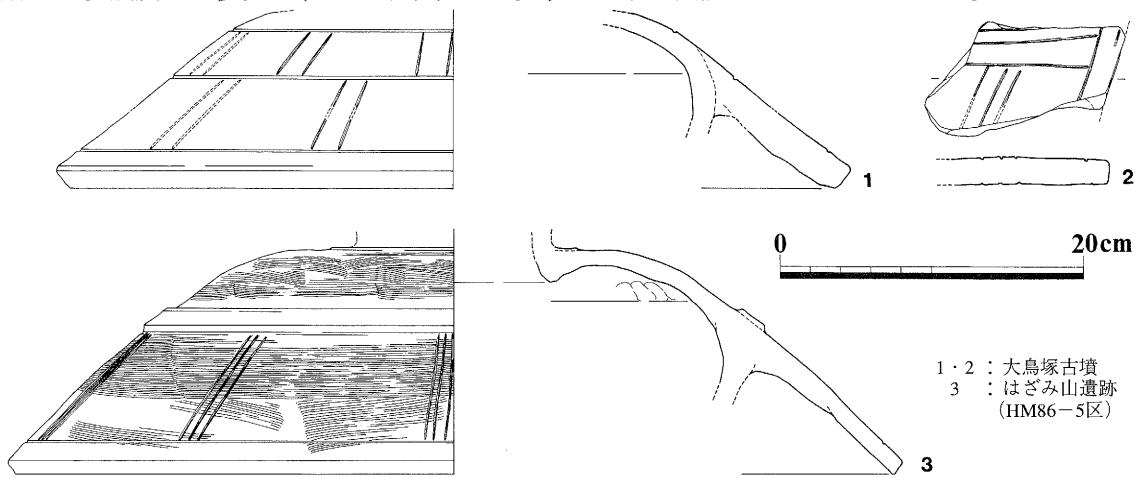


図 106 大鳥塚古墳、はざみ山遺跡出土蓋形埴輪実測図

そこで、これらの出現頻度をみると、A類型では第V期の資料は見当たらない。しかしながら、第IV期の上人ヶ平16号墳からはA類型及びC類型も出土する。この古墳群ではこれ以降の蓋形埴輪はC類型に統一されるようであるから、A類型はこの期をもって終息に向かうものと考えられる。B類型でも5世紀後葉に入ると、その数は減少傾向にある。対して、C類型は5世紀末まで存続する。このことから4世紀末から5世紀初頭にかけて併行するこれら三類型の蓋形埴輪は、5世紀後葉になってC類型に集約されていく状況が窺えるのである。^{註10}

次は、この三類を詳しく検討することで、各類型に共通して存在する時期的变化を明らかにし、そこから変遷の画期を見たいだしたい。

3 蓋形埴輪の変遷

蓋形埴輪は立ち飾り部とそれを受け部、それに続く笠部と台部によって構成される。時期的変遷をみると、たっては、埴輪成形時の影響を最も受けやすい表現部分を追求することが適していると考えられるため、軸受け部と笠部をまず観察し、次に立ち飾りについて検討する。

軸受け部と笠部

軸受け部と笠部における諸要素の変遷に関しては松木の研究[松木1990]に詳しいことから、その時期的な推移を表す各要素を以下に示す。

- 1 軸受け部口縁は直口のものが古く、受け口状に肥厚させるものは新しい。
- 2 軸受け部下端突帯は高い位置にあるものが古く、下部の笠部天井に取り付くものは新しい。
- 3 笠部中位に巡らす突帯は高い位置にあるものが古く、台部との接点付近に取り付くものは新しい傾向を示す。
- 4 笠下半部の放射状に施される線刻は一条ずつのものが古く、二～三条を一組とするものは新しい。
- 5 笠先端部に沿って線刻や突帯を巡らすものは新しい。

今、試みにこの諸要素をもとに先のA・B・Cの各類型を検討する。

軸受け部口縁はA類型の津堂城山古墳例に直口のものがみられる。対して受け口状に肥厚させるものはA類型では第III期の野中宮山古墳例以降に、B類型では第IV期の土師の里8号墳例以降に、C類型でも第IV期の蕃上山古墳例以降に認められる。

軸受け部の下端突帯はA類型では津堂城山古墳・鳥居前古墳例、C類型の舞子浜遺跡例が高い位置にあり、ともに第II期である。各類型とも第III期以降は笠部天井に突帯が取り付くようになる。

笠部中位に巡らす突帯の位置は、A類型の津堂城山古墳・鳥居前古墳例は比較的高い位置にあるが、第III期以降では台部との接点付近に取り付くようになる。B類型ではこういった顕著な傾向はみられないが、C類型の舞子浜遺跡例では突帯の位置が高く、蕃上山古墳例以降では台部との接点付近に巡らすようになる。

笠下半部の放射状の線刻については、A類型では一条ずつ配置するものは第II期に限られるようである。中でも津堂城山古墳例はその配置が上下段ほぼ同位置にあり、庵寺山古墳・鳥居前古墳例は互い違いである点で、前者は後二者に比べ古い様相をもつ。第III期以降では二～三条を一

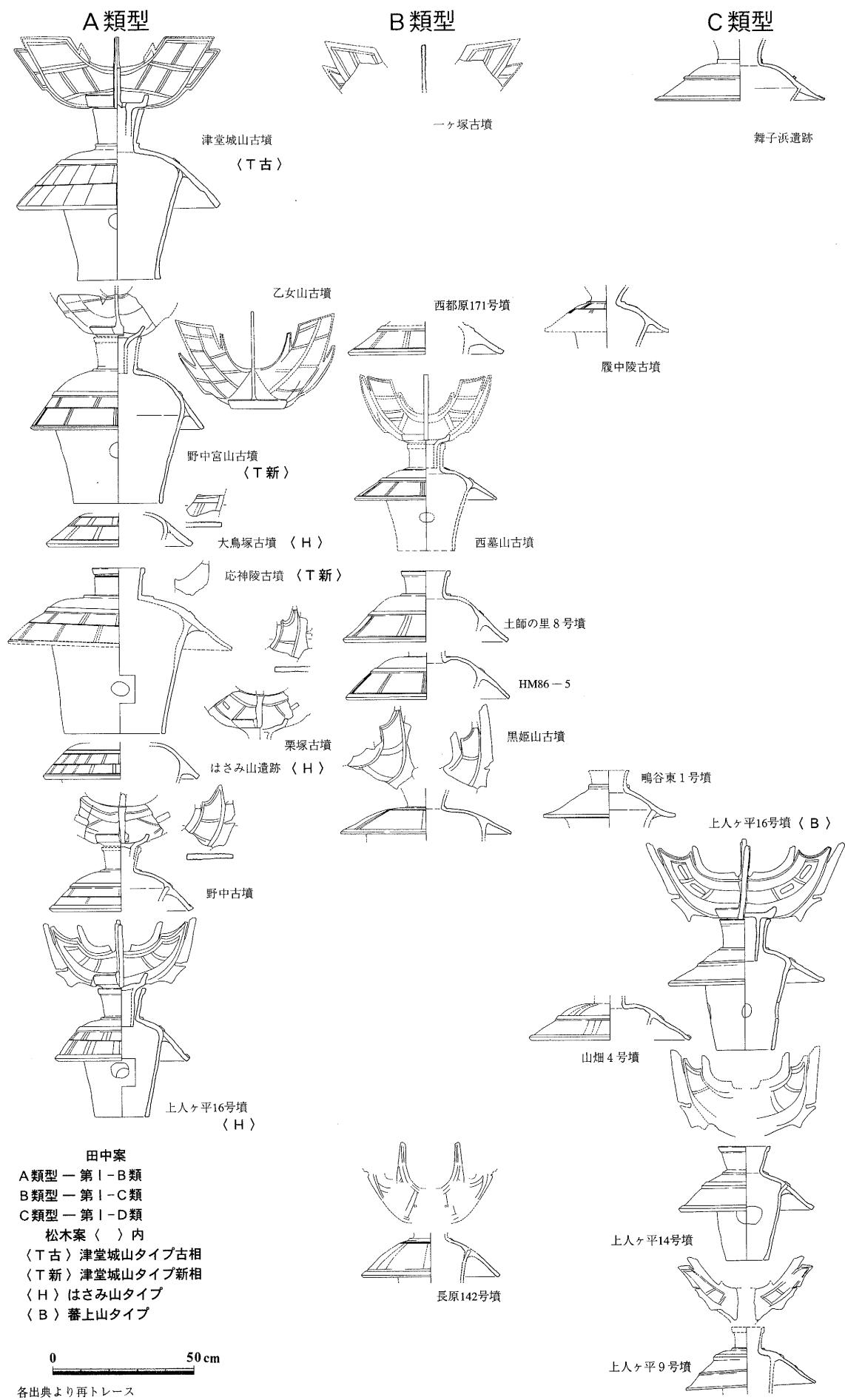


図 107 5世紀代の蓋形埴輪類型別変遷図

組とし上下段互い違いに配置する。B類型でも一条のものは第Ⅱ期の一ヶ塚古墳例にみられ、第Ⅲ期以降は三条を一組とするものが主流を占める。

笠先端部に巡らす線刻は、A類型では鳥居前古墳例以降にみられ、第Ⅳ期の野中古墳例以降ではそれが突帶に変化する。B類型で線刻を巡らすものは第Ⅲ期の西都原171号墳例以降にあり、やはり第Ⅳ期頃に突帶に変わるものである。C類型ではすでに第Ⅱ期の舞子浜遺跡例が突帶を巡らせており、第Ⅳ期になっても同様であることから、この要素に関してはC類型に固有の要素であろう。A・B類型が第Ⅳ期以降に突帶を巡らすようになるのは、この後にC類型に集約されていく状況と関連するのかもしれない。

以上の検討のうち、1.軸受け部口縁の形態、2.軸受け部下端突帶の位置、3.笠部中位に巡らす突帶の位置、の三つの要素に関しては、各類型にわたって第Ⅲ期以降に新しい要素が見いだせた。このように各類型が同様な時期的変遷を追うことは、たとえ笠部の表現に違いがあっても各要素の変化を細かく総合的に関連づけることによって、編年的位置づけが可能であることを示す。しかしながら、その変化は第Ⅱ期の新しい段階から徐々に推移するため、ここでは大きな画期を見いだすことは難しい。

立ち飾り部

立ち飾りの形態を最もよく残し、なおかつ古い様相をもつものはA類型の津堂城山古墳例である。まずこれを観察することによって、これ以降どういった変遷が追えるのかを検討する。

板本体は横に広く、最上辺が水平で直線的である。鰯は直線的で方形をなし、内と外側に一つずつ配する。文様構成は輪郭に沿って線刻で縁取りをし、次に上端と中央部分に三条一組の線刻を施す。そうしてできた空間に縦方向の三条一組の線刻を施している。いわゆる直弧文の一種からくる五線帯を単純化したものである。また鰯部にも線刻を施す。この形態と文様構成に近いものがB類型の一ヶ塚古墳例である。この二例と同じく第Ⅱ期に属するものに庵寺山古墳、鳥居前古墳例があるが、文様帶の縦方向の線刻を欠いており、前二者より新しい傾向が窺える。

対して、第Ⅲ期の野中宮山古墳例ではやや違いがある。全体形態は不明ではあるが、類似するものに奈良県乙女山古墳〔木下1988〕例が挙げられるのでそれを参考にしよう。板本体の最上辺は直線的ではあるが、全体形態は水平方向よりも垂直、上方に伸びる傾向にある。鰯は内、外側ともに本体に沿って長くなり、鰯部にも線刻を施す。文様帶は中央に縦方向の線刻を施し、このあとに二条一組とする横方向の線刻を施していることから、施文方法の退化が指摘される。^{註11}なお、この文様構成は古市古墳群にあっても野中宮山古墳例以外に類例はなく、継続しないことも考えられる。

一方、これに後続する時期の大鳥塚古墳例は全体形態が不明ではあるものの、側辺は直線的である。文様構成においても、津堂城山古墳例や一ヶ塚古墳例にみるような五線帯を単純化したものである。この点においては先行する野中宮山古墳例よりも、津堂城山古墳例に近いものである。

B類型の西墓山古墳例では、全体形態が水平方向よりも上方に伸びており、乙女山古墳例に近い。板本体の最上辺は緩やかに彎曲し、外上方に尖る傾向がある。さらに鰯部は板本体の上辺まで伸びて、先端が三角形をなし尖る。文様構成は横方向の線刻が二条一組のものに変わり、縦方

向の線刻が欠落することと鰭部に線刻を施す点は、前述の鳥居前古墳例に共通する。同時期と考えられるA類型の平塚1号墳例は、鰭部の形態が西墓山古墳例に近いことが分かる。文様帶は縦長の長方形に変化しているものの、その中を二条一組の横方向の線刻を施す点でも共通する。

以上を整理すると次のことが言えるであろう。

全体形態は、第Ⅱ期では横方向に広い板本体が第Ⅲ期では上方に伸びるものとなり、それに従って最上辺も緩やかに彎曲する。鰭部は直線的で方形であったものが、本体に沿って長く伸びるようになる。文様帶においては、A類型の津堂城山古墳例やB類型の一ヶ塚古墳例にみられる五線帶の単純化は、第Ⅲ期の大鳥塚古墳例でも確認できることから、この期まではその文様帶が継承されることが分かる。その一方で、文様帶のさらなる単純化は第Ⅱ期の終わり頃から認められる。それは縦方向の線刻が欠落し、横方向の線刻が二条に変化するもので、この文様帶は以降においても引き継がれる。この文様構成をもちらがらも、幅の狭い長方形の文様帶に変容するものも現われる。

次の第Ⅳ期以降では形態において大きな変化が現れる。文様構成も観察しながら、その変遷を検討したい。

A類型の応神陵古墳からは弧を描く立ち飾りの一部が出土しており、第Ⅲ期以前のものが直線的であったのに対して、この段階においてより新しい様相が窺える。全体形態が不明であるため、時期的に大きく隔てない大阪府栗塚古墳〔吉澤1994b〕例を参考にしよう。これは最上辺が弧を描き外側の鰭部を二つに分割する点で、第Ⅱ・Ⅲ期の全体形態と大きく異なる。一方、文様構成は本体と鰭部との境に線刻を、その後本体の輪郭に沿うように線刻を施し、その間を横方向に二条の線刻を渡す点では第Ⅲ期の西墓山古墳例と大きくは変わらない。しかし、鰭部に線刻を施すことはなくなり、板本体に長方形の透孔を穿つといったことが付加されるなど新しい要素が認められる。

応神陵古墳例に後続する野中古墳例、上人ヶ平16号墳例でも最上辺は弧を描くものである。鰭部は本体よりも高く拡大させ、栗塚古墳例をより発展させた形態をここにみることができる。ただし文様構成は栗塚古墳例と大きくは変わらない。

つまり、最上辺が弧状を呈し、鰭部を本体よりも高く拡大させ、中でも外側の鰭部を二つに分割したり、板本体に長方形の透孔を穿つといった特徴的な形態は、今のところ応神陵古墳段階付近にその初現を見いだせると言えるであろう。

こういった形態はB類型の黒姫山古墳例、C類型では蕃上山古墳、上人ヶ平16・14号墳例においても認められることから、両類型においても少なくとも第Ⅳ期になって移行したものと考える。ただし5世紀後半に集中するC類型は上人ヶ平9号墳例にみられるように、鰭部は本体との区別がつかないほどに形骸化し、この傾向は6世紀に入って、より顕著な形態として発展する。

以上の検討から、立ち飾りは全体形態において第Ⅳ期に大きな変化が認められた。それは板本体の最上辺を弧状にしたり鰭部を本体よりも高くするなどの特徴的な形態変化である。一方、文様構成は第Ⅱ期の終わり頃から単純化、簡略化が進み、この変化は徐々に形を変えながらも引き継がれることとなる。つまり立ち飾りの変遷は、文様構成の変化よりも、装飾の誇大性とも言え

る全体形態の変化が第Ⅳ期に認められる点に、第Ⅲ期に比べて著しい違いを見いだすことができる。

蓋形埴輪の変遷は、笠部の変化が漸移的であったのに対して、立ち飾りの全体形態において第Ⅳ期を境に大きく二分することができる。それは高橋克壽の言う器形の縮小化、写実性の喪失、装飾性の発達を特徴とする段階とも符号し^{註13}、これ以降、関東地方の蓋形埴輪が装飾性をより一層発展させる方向へと向かうこととも連動する。

4 蓋形埴輪の変遷の画期

以上の検討の結果からA・B・Cの各類型を通して、蓋形埴輪の変遷過程をまとめたい。

4世紀末から5世紀にかけて併行して存在する各類型は、立ち飾りの形態や笠部の変化に対して同様の時間的変遷を辿ることが確認できた。中でも各類型を通して著しい変化が認められるのは、第Ⅳ期における立ち飾りの形態である。5世紀中葉以降に主導的な位置を占めるその形態は、第Ⅳ期の応神陵古墳段階を境として大きく変化することができる。その変化は、立ち飾りの仔細な文様構成よりも、最上辺を弧状に抉ったり、鰐部を板本体よりも誇張表現するなどの全体形態に著しい違いを見いだすことができる。また鰐を二つに分割したり、透孔を穿つなど新しい要素を付加する方向へと向かう。松木は初現期の蓋形埴輪を重視するため、こうした変化を本来の姿からかけ離れたものとして退化の方向で捉えている。しかし、5世紀全体を見通した蓋形埴輪の変遷の中で考えるならば、むしろ大きな画期、変換点として捉えることができる。つまり埴輪製作に対する姿勢そのものが、初期の写実性から装飾性へと質的に変化したことが窺え、この意味において前段階の立ち飾りの形態と同一には扱えないと考える。換言するなら、本来の姿をもとにして表現する複数系列が存在し、それを写し取るという姿勢から一新して、埴輪独自の装飾的付加という形態への一定のまとまり、記号化を意識した段階が第Ⅳ期に認められるのである。

蓋形埴輪に見いだすことのできる第Ⅳ期の画期は、円筒埴輪においても認められる（本書第6章第3節）。応神陵古墳段階は埴輪の完全な窯窯焼成の達成と、円筒埴輪におけるB種ヨコハケの統一といった生産体制の統合化が確立した時であり〔一瀬1988a・1992a〕、埴輪生産の内的要因において画期を認めることができる。それは形象埴輪生産もまた新たなる統合化と形象の記号化に向けての時期として内包され、その期をもって5世紀代の蓋形埴輪は大きく二分できるものと考える。

これを契機として、A・B類型は徐々に減少傾向にあるが、一方で5世紀後葉以降は笠部の縮小化と立ち飾りの形骸化を伴いながらもC類型へと集約されていく状況が窺える。蓋形埴輪としての独自の形態はその後、6世紀に入って全体の縮小化、簡略化、装飾のデフォルメといった方向により一層向くのである。

以上述べてきた5世紀を中心とする蓋形埴輪は、応神陵古墳段階において新たなる統合化が推測できる。この点で西墓山古墳出土例は、応神陵古墳段階直前に位置する資料と考えられるのである。これは円筒埴輪から導き出された結論とも矛盾しない。

- 註1 本書第5章第3節に掲載。
- 註2 1984年本市によって南側周濠の調査を実施。造出しの前方部側から出土。別個体の蓋形埴輪に、笠下半部の線刻を二条ずつで互い違いに配するものがある。笠部径は約50cmで図示したものに比べてやや小さい。概要是〔上田睦1993〕を参照。
- 註3 1984年本市によってトレンチ調査を実施し、墳丘裾部を確認した。本例は東側のくびれ部付近より出土。図示した以外にも数点の蓋形埴輪を確認している。概要是〔中西1993〕を参照。
- 註4 1986年本市調査。〔山田1987d〕で報告済みである。今回新たに測図した。
- 註5 1992年調査の周濠部より笠部が出土。笠部中位に突帯を巡らすが、その下半部は二段に分けない。笠部径70cmを測る大型品である。大阪市文化財協会にて実見させていただいた。
- 註6 三基の円筒棺を埋葬施設にもつ古墳である。図示したものは、第2主体部の円筒棺の閉塞に使用していた笠部分で、軸受け部は墳丘の盛土から出土。直接接合はできないが、同一個体として認識されるため復元して掲載した。古墳の時期は仁徳陵古墳併行期と考えるが、転用である蓋形埴輪の時期はこれを下限とするものである。
- 註7 大阪府羽曳野市五手治古墳出土の蓋形埴輪を実見させていただいた。現在整理中で全体の形態は明らかではないが、笠下半部が無文のものと段差で表現するものの二種が確認される。円筒埴輪は川西の編年で第II期にあたり、中でも津堂城山古墳より遡る時期が考えられる。
- 註8 松木も〔松木1994b〕の中で兵庫県五色塚古墳の資料に注目し、これを祖型とする別系統の蓋形埴輪の存在を想定している。また、「地域的な変容の可能性もありえ、その確定については畿内中枢部における今後の資料の充実を待ちたい。」としている。
- 註9 田中は立ち飾りを有する蓋形埴輪を第I類とし、立ち飾りを欠くものを第II類とした。さらに第I類を笠部に施される表現の違いによって4細別する。第I-A類は段差をもって特徴とされるもの、第I-B類は突帯や線刻を中位に巡らし、その下半部を線刻で二段に分け、各段に放射状の線刻を施すもの、第I-C類は下半部を二段に分けないもの、第I-D類は中位に巡る突帯や線刻を欠き無文のものとし、僅かに突帯を巡らすものがあるとした。田中の第I-B類はおおむね本論のA類型に、第I-C類はB類型に、第I-D類はC類型に相当する。
- 註10 松木は立ち飾りを有する蓋形埴輪を第I形式とし、これを肋木の有無でa類（第I形式a類）とb類（第I形式b類）に細別した。本論で問題とする第I形式b類については、田中が笠部の表現の違いを重視して類型化するのに対して、松木は蓋形埴輪を構成する一要素として捉え、一系列に置き換えた。また笠部には表現上に規則性が見いだせるとして、これが変化することを時間的関係と解釈し、その変遷をいくつかの型式の交替の過程と捉えた。このため松木案では、該当するタイプそのものが限られるということと、西墓山古墳例を代表とするようなB類型は退化傾向として捉えられ、5世紀中葉以降の段階に位置づけられることとなり、時期的に齟齬をきたすという問題がある。しかし本論でも述べているように蓋形埴輪には一定の用途、機能の差として複数系列が存在すると捉えることで、こういった矛盾は解消されるものと考える。
- 註11 櫻井は〔櫻井1991〕の中で「縦横の線刻を施す順序が逆転しているわけで、文様本来の意味がまったく忘れられているのである。」と指摘する。
- 註12 黒姫山古墳の時期については5世紀後葉とされるが、出土円筒埴輪を実見した限りでは、その外面調整はBb種ヨコハケであり、応神陵古墳併行期と考える。
- 註13 高橋克壽のいう「第四期」に相当する〔高橋克1988〕。

第5節 墓山古墳出土の人物埴輪について

1 はじめに

墓山古墳出土の人物埴輪にみられる大胆な造作や誇張された表現は、巫女のような写実的な顔を表現する人物埴輪とは趣を異にしている。実物に則した忠実な人物像を表現するというよりも、力強さを強調する点に重点がおかれていたためである。それは、この埴輪がもつ意味を示唆するようでもあり、頭部の形態とも無関係ではないだろう。